

研究ノート

絵本における動物表現をめぐって：熊の歴史から考察する

河合優利佳 博士課程前期1年

はじめに

絵本では多くの動物表現が見られる。その中でも熊を扱う作品は多いように感じられる。そこで熊と人間との関係を歴史的に調査することで、絵本における動物、特に熊の表現や描かれ方について考えていく。

1. 図像としての熊、熊崇拜¹⁾

人間と熊との間に繋がりがあったと考えられている最古の遺跡は、ペリゴール地方（Périgord、フランスの旧州で、現在のドルドーニュ県とほぼ一致している。）にあるルグルドゥーの洞窟内だとされている。この洞窟は今からおよそ八万年前に遡るものであり、洞窟内においてネアンデルタール人の墓とヒグマの墓が繋がっていたことが分かっている。しかし考古学かつ人類学の観点から何一つ確実な根拠や痕跡は一切発見されていないため、ネアンデルタール人以前の人間と熊との関係は未だに解明されていない。時代が進み現代からおよそ三万年前以降になると、次第に証拠類の数も増え、確実なものとなってくる。それらの証拠から、いくつかの特定の時期や特定の地方に、同じテリトリーに人間と熊が住んでいたこと、同じ洞穴を頻繁に利用し、共通の獲物を狩っていたことなどが明らかになってきた。

現在までの研究によって、ネアンデルタール人およびクロマニヨン人の生活圏内に頻繁に登場していた熊は洞穴の熊（*Ursus spelaeus*）とヒグマ（*Ursus arctos*）の二種類であったことが分かっている。双方ともエトルリア熊（*Ursus etruscus*）を祖先として共有している可能性はあるが、ヒグマの直接の祖先は洞穴の熊ではない。先に触れたルグルドゥーの洞窟内で見つかっているのは、ヒグマの墓である。一方で三万五千年前（旧石器時代後期）から洞穴や調度品において、洞穴の熊の絵がしばしば見られる。

この二種類の熊は身体的特徴が大きく異なっていた。ヒグマと比較すると明らかに巨大であったことが分かっている。この二種類の熊の相違は洞穴壁画の頭部の描かれ方から一目瞭然である。またこれらの壁画に見るこ

の熊の相違は描かれる回数にも表れている。先に触れたように、壁画には洞穴の熊が登場することが多かった。それは恐らく洞穴の熊が冬眠のために毎冬、洞穴に避難しに来て、多くの形跡を残したからであろう。一方、ヒグマは洞窟内で冬眠をしなかったため、描かれることが少なかったと考えられる。壁画に多く姿を描かれた洞穴の熊ではあるが、一万五千年前ないし一万二千年前に突如姿を消した。その理由や原因は未だに全く解明されていない。

洞窟内の壁画として描き残されていた熊について述べてきたが、旧石器時代の芸術的な動物表象において、数の点から見ても熊は決して花形かつスター的存在ではなかった。西ヨーロッパで発見されている四十四カ所の遺跡全てを対象にして見ても、認識可能な動物図像の中でも、熊だと認定されているのは約二パーセントに過ぎない。加えて野獣の種類を見分けることは極めて困難であるため、現時点で熊とされている図像の真偽についても一層の研究時間が必要である。熊とは対照的に、壁画に頻繁に描かれたり彫られたりした動物は馬とバイソンであった。この二種類に次いで、マンモスやアイベックス、シカ、トナカイ、オーロックスが登場している。一方でネコ科の動物やサイは稀であり、鳥類や魚類となるとさらに稀少であった。

当時の熊の全洞穴壁画の中でも、最古の描写（およそ三万二千年前から三万年前）を含み、絵図の数も最多なのはショヴェ洞窟（Grotte Chauvet、フランス南部アルデーシュ県ヴァロン＝ポン＝ダルク（Vallon-Pont-d'Arc）付近にある洞窟。）である。この洞窟内では、壁画に加えて熊の頭蓋骨の奇妙な破片が並べてあり、これは儀式的な意味が含まれているのではないかと考えられている。またこの洞窟の独自な点として、先に挙げたような消費大型草食獣はメインになっておらず、むしろ危険な動物（熊やライオン、ヒョウ、サイなど）が多数を占めていたことが挙げられる。その中でも最多で描かれているのは熊ではなく、サイである。確かに図像の数ではサイが多いが、熊の図像が、熊の残した痕跡と呼応しており、他の獣よりもその存在がはっきりと感じられるのである。

頭蓋骨の奇妙な配列に加えて、熊の図像は他の動物と比較しても、その

描かれ方はバリエーション豊かであり、多様な姿勢で描かれている。同時にどの時代であっても、熊はその描写が最も様式化かつ図式化されており、正面から印された唯一の動物である。

先に触れたように、先史人と熊は洞窟を共有していた。しかしその使用頻度は異なっていた。常に暗く、居心地の悪い洞穴に人間は住み着かなかった。また洞穴は人間にとっては恐怖心をかきたてる場所でもあった。一方、このような恐怖心などと無縁であった熊は何万年もの間、頻繁に通っていた。熊が洞穴に生息したことは、体毛の痕跡や床の粘土に刻まれた脚の跡などから明らかである。しかしこのような熊の存在の痕跡よりも、洞窟内で頻繁に発見されるのは頭蓋骨なのである。もちろん他の動物の頭蓋骨も発見されているが、熊のそれは圧倒的な割合（八十パーセントから九十パーセント、時には百パーセントのこともあり得る。）を誇る。またこの熊の頭蓋骨の配置方法は奇妙な特異性を持っており、他の動物のものとは似たような兆候は一切見出せない。これらの事実から、熊を崇めたてる熊崇拜が存在していたのではないかと考える研究者もいる。一方でこのような熊崇拜への見解に否定的な研究者も存在することも事実である。よって洞窟内における動物および熊の図像についてのさらなる研究が待たれるばかりである。

先史の時代における熊と人間との関係を軽くではあるが触れてきた。では有史の時代のヨーロッパ圏内における人間と熊の関係はどうであったのか。

2. 神話と熊²⁾

先史時代の熊と有史時代以降の熊とを繋げる諸要素を検討するために、ギリシア神話は不可欠である。洞窟は不穏な暗闇（怪物や悪霊が棲みつき、不安・無知・苦痛・刑罰が充満する場）であり、一方で神聖不可侵な場（人間が神々との連結を深め、魔術的力の補足、新たなエネルギーの汲み取りを行うために足を運ぶ場）であった。また多くの英雄が誕生し、能力を高め、変身を遂げる圏域でもあった。このように洞窟に入るといのは、

常にある状態から別の状態に変化を遂げることを意味していた。以上のことから多くの神話では、洞窟とは両義的かつ重要な役割を果たしている。なおギリシア神話内における熊それ自体は神的存在ではなく、一定の神々を指示する表^{アドリビュート}象に過ぎない。

ギリシア時代の熊は洞穴の熊《Pours des cavernes》ではなく、ヒグマになっていた。ヒグマは生物学的かつ象徴的次元において、人類に最も近い種であるとされた。そのため熊は動物の表徴とされ、また狩猟の女神アルテミス（ゼウスの娘であり、アポロンの双子の妹）の表象とされた。アルテミスは永遠に処女を貫くことを誓い、狩猟にしか興味を示さなかった。また彼女は月輪と森林、山々の神でもあったため、野生動物の保護者でもあった。また熊の守護神でもあり、時には熊の外観を纏うことさえあった。

アルテミスという名前自体も熊に関係している。この語の語源は、熊を意味するインド＝ヨーロッパ語族起源の言葉の語根（art-, arct-, ars-, ors-, urs-など）に由来しており、特にギリシア語の arktos に起源を属すとされている。

人間と熊とを結び付ける神話上の主要な主題は三つ挙げられる。まず一つ目は変身のテーマである。次いで二つ目は人間の子どもを引き取り育てる母親および保護者としての雌熊の題材である。そして三つ目には人間と熊との間の特異な性愛のモチーフである。順に見ていく。

①変身

このテーマでは二人の女性の逸話が挙げられる。アルカディア王リュカイオンの娘カリストとイフィゲネイアである。王国アルカディアは語源的な視点から見ると、熊の国（土地）を意味している。もちろんアルカディアだけでなく、古代ギリシアには随所で熊が見られた。

(1) カリストの場合

カリストは類い稀な美貌であったが、男を一切寄せ付けず、むしろアルテミスの供として同行する狩猟を好んだ。彼女自身も女神であり、貞潔の誓いを立てていたためである。ある日、彼女に一目惚れしたゼウスはアルテミスに化け、彼女を犯し、妊娠させてしまう。この一件を知ったアルテ

ミスは激怒し、カリストに矢を放ち、彼女と子を切り離してやる。同時に彼女を雌熊に変身させてしまう。以後、彼女は熊の姿で森を彷徨うこととなる。一方、彼女の息子アルカスは成長し、アルカディアの王位を継ぐ。ある日、彼が狩りへ行くと、雌熊の姿のままである母カリストに遭遇する。実はこの雌熊が実母であることを知らないアルカスは雌熊を殺そうとする。母親殺しの罪を犯さないようにするため、ゼウスは彼を熊ないし小熊に変身させる。その後ゼウスはこの熊の親子を天空に上げ、それぞれ大熊、小熊の二星座に変えたのだ。別の解釈によれば、ゼウスの妻ヘラの逆鱗に触れたからだと言われている。ヘラが彼女（カリスト）を雌熊に変身させたが、ゼウスが彼女を北極の星座にして救ってしまった。そのためヘラはポセイドンにこの天空の雌熊を大海で決して休息できないようにして欲しいと頼んだと言われている。そのため大熊座と小熊座の二つのみが唯一常に水平線の上に留まっている星座となったのだ。

(2) イフィゲネイアの場合

トロイアへ向けて出帆する寸前に風が止んでしまい、ギリシア艦隊は進行を妨げられた。風を止むように囚ったのは女神アルテミスであった。そのためこの狩猟の女神の怒りを静めようと、イフィゲネイアの父アガメムノン自身は自身の娘を生け贄として差し出さねばならないとアルゴスの王に強く進言する。王はこの申し立てを最初こそ退けたが、王の実弟メネラオス（トロイア戦争の発端を作った人物）が再三催促したため、結果的にアキレスとの婚約を口実に彼女を確保させる。その後国王は彼女を結婚目的ではなく、生け贄としてアルテミスをまつる祭壇へ連れて行った。若いイフィゲネイアを憐れに思ったアルテミスは、彼女を雌熊に変え、タウリス（クリミア）まで連れて行き、自身の祭司長を務めさせた。しかし彼女の弟オレステスが突如現れ、彼女を救出した。この逸話ではイフィゲネイアは牝鹿あるいは雌牛に変身させられるパターンもある。しかし女神アルテミスの能力が一番適合していることや、最古の起源を有することや比類なく高い頻度から考えて、熊への変身が適していると考えられる。

②母親および保護者としての雌熊

続いて、人間の子どもを野生動物が救い育てるといったテーマの逸話を見ていく。この題材は多くの神話や英雄を扱った伝記で扱われる。ローマの雌狼が有名であるが、ギリシア神話では雌熊を登場させている。

(1) アタランテの場合

アタランテの父イアソス（アルカディア国王）は子孫は男系のみで十分だと考えたため、生まれて間もない娘アタランテをパルテニオン山の森の中に捨てた。彼女は雌熊に拾われ手厚く養われ、幼少期を過ごした。その後狩人によって男性と同じような厳しい教育を受け、彼女は恐るべき女狩人へと成長した。美しく成長した彼女はアルテミスと同様に処女を貫く誓いを立てていたため、片端から言い寄る男性を葬り去った。次第に彼女の男勝りな評判は彼女の父の耳にも届く。彼は彼女を結婚させ、子孫を得ようと考えた。彼女はこの申し出を断るものの、ある条件の下承諾する。男性に不利な条件であったが、幾人もの若者が挑戦し、敗退し命を落とした。そのような中、ヒッポメネス（アフロディテのお気に入り）が求婚した。彼は女神から三つの金のリングを受け取り、見事アタランテに勝利し、彼女と結ばれる。しかしこの若き夫婦はアフロディテへの感謝を忘れてしまったため、怒った女神によってライオンに姿を変えられてしまう。この逸話にはいくつかのヴァージョンがある。女神アルテミスの場合、自分の愛弟子を失ったことへの怒りから、この夫婦を熊に変えてしまうのである。

(2) トロイア国王の第二王子パリスの場合

トロイアの王妃は、第二王子出産間近に不吉な夢を見る。生まれてくる子どもがトロイアを崩壊に導くというものであったため、国王は生まれた子どもをイーダ山に放置してしまう。飢えと寒さで死にかけいたパリスを雌熊が拾い、育てる。その後羊飼いに引き取られ、美しい青年へと成長する。ある日、群れを見張っていたパリスを見つけたヘルメスは彼にある依頼事をする。それはゼウスの名に懸けて、ヘラ、アテナ、アフロディテの中から最も美しい女神を選び、その相手に金のリングを渡さなくてはならないという。結局パリスはアフロディテのアフロディテを選んだが、残り

の二女神の反感を買ってしまう。その後トロイアに戻った彼は親類縁者から歓迎を受ける。まもなくしてペロポネソス半島にて美女ヘレナに一目惚れをし、彼女を略奪した。トロイア戦争開戦時のエピソードだとされている。

③熊との特異な関係

(1) ポリュフォンテスの場合

彼女も他のエピソードの登場人物と同様、アルテミスへの貞潔の誓いを立てる。しかし女神アフロディテにとっては、彼女のこの誓いは女神への挑戦であり、怒りを覚えた。そのため女神はあの手この手でポリュフォンテスを誘惑する。しかし彼女はアルテミスへの決心を崩さなかったため、アフロディテは癩癩を起し、雄熊に彼女を襲うように性的欲求を吹き込んだ。彼女は二人の男子を生むが、この二人は驚異的な力を備え、神をも人間をも恐れなかった。彼らに恐れを抱いたゼウスはヘルメスに命じて彼らを殺そうとするが、失敗に終わった。ポリュフォンテスの祖先である神アレスはこの親子を憐れに思い、全員を鳥に変えてしまった。彼らは一羽のミミズクと二羽のコンドルといった恐ろしい鳥類に変異させたのである。

(2) ケパロスの場合

この上ない肉体美を持った若い狩人である。他の異なった神話の英雄としても登場するため、一貫性に欠ける。

彼は自身の妻を深く愛していたが、子どものいないまま自身の過失により妻を失ってしまった。そのため強く息子を欲しいと願っていた。神託を求めて詣でたところ、最初に出会ったメスと番えと告げられる。帰途につき、出会った雌熊と関係を持ち、息子を得る。この子どもの子孫にはオデュッセウスも含まれている。

まとめ

以上のように、ギリシア神話における熊との関係を見てきた。①変身では登場人物は神々に翻弄された結果、自身の意思とは関係なく人間から熊

へと姿を変えられしまう。続く②保護者としての雌熊の逸話においては、肉親の勝手な都合で捨てられ、熊そして人間に養育されている。また肉親の勝手な意図によって翻弄され、結果として悲惨な結末を迎えていることが分かる。また幼少期を熊に育てられたことで、人間的理性よりも動物的本能に突き動かされ最終的な選択を下したのではないか。そして③熊との特異な関係を持ったポリュフォンテスは、理不尽な女神の被害者である。

①変身と③特異な関係においては、登場人物の若さゆえの純粹さ、②保護者としての熊では、若さゆえの浅はかさといったことが熊と人間とを繋いでいるのではないだろうか。

ギリシア神話同様、ケルト神話でも人間と動物の交合が見られる。また英雄の中には熊的な性質を持つ者がいるが、彼らは雌熊の庇護者である女神や妖精に育てられている。またケルトの神々には、ケルト人や南ドイツ人、スイス人にとってアルテミスに近い存在である女性が多く現れている。その中でも顕著なのは女神アルティオである。この女神の主な属性もやはり熊に起因している。ケルト神話に限ったことではなく、熊に関する逸話はアーサー王に関するそれにも見出せる。なぜならゲルマン人やバルト人、スラヴ人同様、ケルト人にとっても熊は百獣の王であり、国王に相応しいとされていたからだ。

女神の名称が語源的に熊に由来しており、またその名称を基に地名にまでも熊に由来している。列挙した神話の逸話より、人間と熊が実は密接な関係があったと言えるだろう。

3. 熊と王³⁾

あらゆる文化、歴史において、自分たちの強さや権力の象徴として、ある特定の動物を選出し百獣の王として中心的役割を与える。特に選出の際、その動物に不敗神話があることが必要不可欠だ。この動物の選出には地域によって異なる。ヨーロッパにおいては長きにわたって熊が百獣の王として君臨していた。なぜなら熊はいかなる時も不敗であり、またヘラクレス的な力を秘めていると思われていたからである。

ヨーロッパ土着の動物の中で太古の昔から、熊は強烈な力や印象を人間に与えていた。つまりヨーロッパにおいて熊は最強であり、百獣の王に相応しかったのだ。ヒグマに見られるその身体の巨大さや頑丈さ、他の動物や人間への攻撃力がずば抜けていた。この動物は熱暑に弱いということを除けば、事実上無敵であった。このような熊の無敵さは人間を魅了し惹きつけてきた。また熊のこの無敵さは森の中にとどまらず、ローマでの円形競技場でも際立っていた。しかしローマ人は熊よりもライオンあるいはゾウを王位につけたがっていた。

ゲルマンの戦士にとって、この動物は単なる百獣の王といった意味だけでなく、自らの象徴かつ祖先であるとしていた。この動物の強靭さや無敵さを少しでもわが身に帯びたいという、トーテム信仰が存在していたと言える。また若者にとって熊との闘いは大人の戦士になるための必要不可欠な儀式であった。このような猛獣との一対一の闘いは勇敢であることの証明となった。これはキリスト教化が済んでも、依然としてドイツ北部やノルウェーの若い貴族などの間に残っていた。

(1) ゴドフロアの逸話

1099年の春、十字軍側がエルサレムを占領する数週間前の時期にある伝説が残っている。若き十字軍のリーダーの一人ゴドフロア・ド・ブイヨンはある日乗馬をし、一人山中へ入った。すると桁外れに巨大な熊が巡礼者に襲いかかった。彼はすぐさまその巡礼者を助け、たった一人で熊に立ち向かった。駆け付けた友人の助けもあり、死闘の末、彼は熊にとどめを刺した。彼のこの功績は、ゴドフロアをエルサレムの最初の国王に仕立てあげるために必要であった。

ゴドフロアのこの逸話はゲルマン的伝統において、彼が熊を打倒した強きリーダーであったことを証明しており、人間と熊の関係が良く表れている。しかしこの逸話はあくまでも伝説にすぎない。伝説にすぎないこの成功例は武勲詩や騎士道物語などの下敷きとして繰り返し書かれている。続いてアーサー王に関する物語と熊の関係を見ていく。

(2) アーサー王の逸話

騎士道物語ではアーサー王は熊に変身することも、一対一の死闘を繰り返すこともない。しかしアーサー王自体に熊のイメージを見ることが出来る。特に『アーサー王の死』 *Mort le roi Artu* に書かれた王の姿が特徴的だ。重傷を負って瀕死のアーサー王が横たわるところへ忠実な部下が近づき、別れの言葉を述べようとする。アーサーは姿勢を正し、彼を抱擁したが、あまりにも強く抱きしめたため窒息死させてしまう。この場面は物語の展開には大きく関わらない出来事であるが、王は瀕死の状態であっても熊と同様、抱擁だけで相手を殺すことが出来る力を保持していると分かる。このような力は一般的な人間には備わっていない。

またアーサーの最期が熊の冬眠の時期と重なっている。ヨーロッパ随所で行われた熊の冬眠に入る時期を祝う祭りの時期である 11 月 11 日に王は亡くなっている。だが物語においてアーサーは実は死んではいない。瀕死であり、休息するため異界へと連れていかれ、まどろみだけである。このまどろみも熊の冬眠を連想させ、熊=王という設定を感じさせる。王の最期の期日と同様、熊に捧げられた祝祭日と重なっている重要な出来事がある。物語では、統治権の象徴である魔術的剣を金敷きから無事に引き抜いた者が正当な王とされ、アーサーただ一人が成功する。また彼が偉業を成し遂げた二回の期日はそれぞれクリスマスおよび 2 月 2 日であったとされている。この 2 月 2 日とは熊が冬眠を終えるのを祝う日であった。熊と同様に、王も冬眠から覚めるように復活を遂げるというイメージを重ねているのだろう。

だが先に触れた熊の冬眠に関するヨーロッパ古来に伝わる祝祭の儀式をキリスト教会は野蛮であると、排除かつ撲滅しようとした。その代わりに熊と関連のある名称や物語を持つ全聖人の祝日に置き換えた。このように次第にキリスト教会は熊に纏わる土着の祝祭の儀式を、野蛮であるという理由から攻撃し、キリストに関する祭典に置き換えるようになっていく。

逸話に見られるだけでなく、熊は古典古代の時代に既に高貴な存在であった。中でも後期のローマ帝国では皇帝とその部下たちが好んで熊を狩っ

ていた。そもそも熊は恐ろしく畏怖されており、皇帝や王にとって恰好の強敵であったのだ。先に触れたゲルマンの戦士と同様、熊との一对一の死闘を制した後に王たちは栄光や喜びを得ていた。このような熊の狩猟は中世教会が狩猟禁止政策を企て、失敗した12,13世紀まで続いた。しかし教会の企てにより、熊狩りやイノシシ狩りは野蛮であり、王のすることではないといった意識を広め、次第にシカ狩りこそ王者に相応しいと認識されるようになる。

王たちは熊狩りだけでなく、動物を所有することでも己の権力を誇示していた。動物および動物園を保有できるだけの財力を得ていたのが国王や君主、偉大な支配者のみであった。彼らにとって動物園は権力を他者へ見せつける財宝であり、政治的道具であった。だが、現在の研究ではどの動物をどのような比率で飼育していたのかは未だに明らかになっていない。ただ中世初期の動物園では熊が支配的であり、次いでイノシシやライオンが続いていたことは分かっている。また12世紀に至るまで一頭ないし数頭の熊を飼育することが国王ないし君主の動物園では義務付けられていた。当時、熊は最良の贈答品であるとされ、ノルウェー国王がシロクマを贈呈したことが分かっている。君主間で交わされる同盟や平和条約に伴う贈り物、あるいは嫁ぎ先への持参金として熊は実に一般的であった。

中世において、熊ほど人間に姿形が似ている動物はいないと考えられていた。人間の作りと熊のそれがほぼ同じであるためである。しかし時代が進むにつれ、この考えは強い批判を受ける。18世紀になると、人間と熊との共通点よりも相違点を指摘する者も多く現れた。

熊が人間に類似した存在であるとされた12世紀において、次のような逸話が残っている。エジプトのスルタンとの戦争中にエルサレム国王が重傷を負った。この王の負った傷は致命傷で、医師たちも治療の施しようが無く、途方に暮れていた。すると医師たちの中の一人が新しい治療法を試したく、王と同様の怪我を負ったイスラム教徒捕虜を実験台にしたいと申し出た。しかし人道的にそれを許可しなかった国王は捕虜の代わりに動物園の熊を使用するよう提案した。熊を用いた試験治療の末、熊は死んでしまったが、新たな治療法を発見し、国王は一命を取り留めた。

この逸話において医師は、熊＝無益な存在と考えていたことが分かる。しかし同時に君主を治療するための生物学的かつ象徴的条件をクリアしている動物は熊以外にないことも承知していた。

まとめ

以上のように、熊は強靱な身体、対峙した相手から逃げ出さない性質を持つ不敗かつ無敵な唯一の動物だと考えられてきた。熊狩りは君主ないし国王の嗜みであった。また熊を動物園内において飼育することが他者への己の力（権力や支配力など）を誇示する最善の方法であった。人間の姿に熊のそれが類似していることも加わり、王に相応しい動物＝熊となっていたのであろう。

先に触れたアーサー王の物語やゲルマン戦士の伝説からも分かるように、王に相応しい動物＝熊の構図が反映している。

4. 徐々に変化する熊へのイメージ⁴⁾

ヨーロッパの随所に住み着き、百獣の王とされ、恐れられた存在、かつ君主と戦士のシンボルであり人間と深い関係のある存在で、北ヨーロッパ全土にわたる異教的崇拝と儀式の対象とされる獣、熊を中世初期のキリスト教会は忌み嫌った。姿形が人間に近似しているため、熊を悪魔の産物としていた。キリスト教会は早い時期にこの獣を王座から追放し、新たに別の猛獣を据えようと熊に闘いを仕掛けた。

熊を王座から追い落とすために教会による熊のネガティブキャンペーンが開始する。教会の戦略の一つとして、人々が持つ熊の威圧的イメージを払拭するため、人間にとって取るに足らない弱敵＝熊であると示したのである。そのようなイメージの対象を君主や国王、戦士、獵師にするのではなく、聖人にしたのだ。聖人は神の似姿として創られた人間であり、その存在と熊のような不完全な動物存在を出来得る限り明瞭に対峙させる必要があった。特に聖なる隠遁者と熊を対峙させた。森の奥深い洞穴に身を落ち着かせる熊も一種の隠者だと言えよう。熊と隠遁者である聖人とのエピソード

ソードが伝えられるようになる。

例えばある逸話で、ある聖者が道中、激しい嵐に襲われたため洞窟の中に逃げ込んだ。しかしそこには既に熊が棲んでおり、住処を共有する気は少しもなかったため、熊は聖人に威嚇的な態度を取った。これに対し聖人は怯えることなく、同様の態度で言葉の力によって熊を説き伏せてしまう。遂には熊を従えさせ、洞窟内に己の居場所を確保してしまった。このように神に仕える人間が野獣よりも優位にいることを示した教訓的な逸話である。

また次のような教訓的逸話もある。道中、従者と共に休憩していた聖人のところへ空腹であろう一頭の熊が現れ、食糧を横取りしようとした。この聖人は怯えることなく熊に話しかけ、暖を取るための材木を集めてくるように命じる。熊はこの命令に素直に従い、聖人と熊は生活を共にするようになる。熊は素直に従い、次第に修道院の建設を担うようになる。このような聖人と熊の驚異的な逸話は一種の紋切り型であった。ゲルマン地方や山間部に広まっていた異教的崇拜を撃退するために、百獣の王と神に仕える人間が会うことに重点が置かれている。聖人に従順でよく働く熊の姿を教会はひたすら広めたのである。

このような労働をする熊に加え、聖人に奉仕せざるを得なくなった熊もいる。この熊の場合は、自身の犯した罪を償うために聖人に奉仕するのである。奉仕する熊の逸話も紋切り型である。道中、荷物運搬用のラバなどの動物を突如出現した熊が襲い食べてしまう。これに激怒した聖人は犠牲となった動物の代替として熊を使用するのである。このような逸話が浸透していくと、アルプス低地の大部分の村では次第に熊崇拜は意味を失っていった。

以上のような逸話を用いてキリスト教会は古来の熊崇拜を撃退すべく動き始めた。聖人>熊という構図を逸話内に盛り込むことで聖人ないし教会の偉大さを広めようと試みた。野生動物よりも神に忠実な人間の強さを浸透させるため、異教的儀式や祝日に地方色や地域色の強い聖人たちの祭典日を重ね、変更していった。変更する際に、その聖人が熊と何らかの関わりのある点に注意を払っていた。その注意が特に顕著になっているのは、

熊と関わりの深い聖マルタンの祝祭日を11月11日に固定したことだ。先にアーサー王に関する逸話の件でも触れたように、この日は冬眠する熊の印象が強い。そのためケルト系言語内で熊を意味する用語と近いマルタン Martin という名称を持ち、己の管理下に熊を置いた逸話を持つ彼がこの日に適していた。

5世紀以降になると、このような諸聖人への崇拜が飛躍的に発展し、聖人のための多くの祭典が徐々に浸透していく。やがてキリスト教の祭典日が広まっていくうちに、古来からのローマおよび異教の暦を完全に駆逐してしまった。

このように教会による熊へのネガティブキャンペーンを積極的に行うこと、そして物理的な熊の排除を行うことで、従来の熊崇拜を駆逐することに教会は苦心していた。そこで聖書内のエピソードと関連付けて熊=悪魔という構図を次第に作り出していった。

しかし聖書の中において熊に関しての言及はほとんど存在せず、曖昧なものとなった。それでもなお熊の危険性のイメージを植え付けるため、数節を割いて熊の野蛮性、獰猛さ、残忍さを描き出した。またアリストテレスは熊の冬眠が実に奇妙だと主張し、熊の不気味さを強調した。

封建時代の西欧では人々は頻繁に夢を見ていたと言われている。特に修道院では夢を見る機会が多く、夢の中に熊の姿に変装した悪魔が登場する逸話が伝えられている。また熊の褐色の体毛に覆われた姿を悪魔的存在と同一視していた。この褐色というのは、中世の語彙においては、色褪せ、薄暗く、汚れているとされていた。

かつてはそれ自体が持つ強靭さにあやかりたいと強さの象徴として崇められていた熊であるが、キリスト教布教が強まるにつれて聖人の下に置かれる支配される存在となっていった。挙句の果てに熊は悪魔であるといったネガティブなイメージまで作り上げられてしまった。もはやかつての熊=強力な王ないし君主といったイメージはない。

一方、次第に強さや君主の象徴としてライオンが登場する機会が増えてくる。大貴族や君主が使用していた紋章にもライオンが多く選ばれるようになった。このようなライオンが中心的位置を占める状況は徐々に王ない

し君主の名称にも広まった。紋章だけではなく、絵画や図像にもライオンを用いることが増えた。

絵画などの図像だけでなく、君主の所有する動物園にも影響を与えた。前述したように動物園内での一頭ないし数頭の熊の所有は義務であり、最良の贈答品は熊であった。しかし12世紀後半から状況は大きく変化し、熊はその地位をライオンに奪われてしまう。

次第に文学作品に登場する熊のイメージまで塗り替えられてしまう。『キツネ物語』に登場する熊ブランに与えられた性格は枝編全体を通して一貫している。しかし決して高評価できるような性格ではなく、愚鈍で滑稽で、絶えずキツネの標的となり犠牲になっている。他の動物からも軽蔑と嘲笑の対象にされてしまう。唯一の長所として国王ノーブル（ライオン）への無条件の忠実さが書かれている。しかしこれ以外の特徴は粗野で短気、臆病といった欠点や欠陥の積み重ねでしかない。

国王ノーブルの前で、自分がキツネから被った被害を熊のブランが述べるという場面がある。始めのうちは国王の重臣であるゆえの丁寧な口調である。しかし次第に口上が進むにつれ、語調は乱雑なものとなっていく。もちろん翻訳であることも考慮に入れなくてはならない。だが、この場面から熊の頭に血が上りやすい、短気な性格が読み取れるのではないだろうか。⁵⁾

またこの物語だけではなく、先述したゴドフロアの逸話も次第に変化する。彼が闘ったのは熊ではなく、ライオンであると対象動物がすり替わってしまったのだ。

5. 絵本における熊⁶⁾

以上のように、キリスト教拡大に伴い、次第に熊に与えられたイメージは大きく変化した。王としてではなく、悪魔的イメージを纏った愚鈍な熊、このようなイメージは絵本においても変わらないのであろうか。

ここではパール・カストール叢書 (*Les Albums du Père Castor*, 1931) の作品であるミシュカ (*Michka*, 1941) を取り上げる。この作品は一体の熊のぬい

ぐるみがメインの物語である。なぜあらゆる動物の中から熊がメインに選ばれたのか。

簡単にあらすじを説明すると、ある雪の朝、熊のぬいぐるみであるミシュカは意を決して持ち主の家から出てゆく。森の中を歩き続けるうちに、ミシュカはいろいろな野生動物に出会う。一頭のトナカイ（クリスマスの準備をしている。）との出会いによって、良い行い *une bonne action* とは何かを考える。そしてある貧しい家の子どものために再びぬいぐるみとして生きることを自ら選択するという物語である。

この作品に登場する熊ミシュカにも、先述したような短気さを見ることが出来る。持ち主の家から出てきたミシュカは最初に *le roitelet*（キクイタダギという種類の鳥）に出会う。この鳥はミシュカの跡をつけ、いたずらをする。まんまとこの鳥のいたずらに引っかかったミシュカを鳥は大笑いする。ミシュカの足跡にできた雪の窟みに隠れていたこの鳥を見つけだしたミシュカはこの鳥を噛み声で威嚇する。姿の見えない相手がいたずらを仕掛けてきたら腹が立つのは当然のことだ。しかし単に相手を威嚇し反撃するというのは腹いせでしかない。このような行動しか取れない様子からミシュカの幼さ、短気さが読み取れる。

またミシュカの短気さを表している場面がある。森の中で蜂蜜の入った瓶をミシュカが見つかる。蜂蜜を食べたい一心で蓋をなんとかして開けようと試みるが、なかなか上手くできない。しばらくすると、痲癩を起して瓶を投げてしまう。投げた拍子に瓶が木にぶつかり、蓋が空き、ミシュカは蜂蜜を食べることが出来た。思い通りに何かを行えないゆえに痲癩を起し、途中で諦めようとするといった行動からもミシュカの短気さと幼さが読み取れる。ではミシュカにはこのような欠点しか描かれていないのか。

物語が終盤に近づくにつれ、ミシュカは自主的な行動を取るようになる。クリスマスの準備をするトナカイの手伝いを進んで行き、次第に良い行い *une bonne action* とは何かを考え始める。最後の一軒で配布してた贈り物が無くなってしまったが、ミシュカは何も言わず、自主的に自身が贈り物となることを選んだ。そして野生の熊ではなく、ぬいぐるみとして生きることを決意するのである。自ら思考し行動するミシュカからは、先に触れた

ような愚図でのろまな熊のイメージはあまり感じられない。己よりも他者を思う気持ちを学んでいる姿の方が読者の印象に残る。

ではなぜ熊にする必要があったのであろうか。恐らくキリスト教拡大以前のイメージを強く受け継いでいるのだろう。置かれた場所から旅立ち、成長を遂げるためのキャラクターとして人間に姿形が似ている方が好ましい。だからこそ小熊をメインに採用したのだろう。そして人間との関係も考慮したうえで実際の熊ではなく、ぬいぐるみとなったのだろう。また読者である子どもの存在を作者や編者が強く意識していたのではないだろうか。幼い子どもが初めての友として肌身離さず持っているであろうぬいぐるみをメインにすることで、子どもは作品にのめり込むことが出来る。そのためにも少しでも子どもと近似した姿であることが望ましい。そのような理由からミシュカは熊の子どもであり、ぬいぐるみなのだと考える。

6. 考察、今後の課題

以上のように、人間と熊の関係を調査した。全動物の王であったはずの熊がキリスト教拡大に伴って次第に悪魔的イメージを与えられてしまった。その変化かつ影響は文学作品にも見られ、愚図でのろまなといったマイナスなものである。しかし絵本に登場する熊には、このような性格だけとは限らない。成長する存在としても描かれているのではないだろうか。

今回は一作品のみしか分析できなかったため、今後同叢書内に登場する熊について分析し、考察する必要がある。また熊ないし熊のぬいぐるみがメインの海外の作品についての分析、考察も必要不可欠である。

注

- 1) ミシェル・バストゥロー『熊の歴史——〈百獣の王〉にみる西洋精神史』平野隆文訳、筑摩書房、2014年、pp.14-34 1.1 参照
- 2) ミシェル・バストゥロー前出書、pp.34 1.3-42 参照
- 3) ミシェル・バストゥロー前出書、pp.43-84 1.2 参照

- 4) ミシェル・パストゥロー前出書、pp.110-187.1.2 参照
- 5) 鈴木覺、福本直之、原野昇訳『狐物語』岩波書店、2009年、pp.108-153 (第八話) 参照
- 6) conte ; Marie Colmont, dessins ; F.Rojankovsky, *Mibka*, Les classiques du Père Castor, Flammarion (ISBN 978-2-0816-0240-3, ISSN 1768-2061), en France, 1941 参照

参考文献

- ミシェル・パストゥロー『熊の歴史——〈百獣の王〉にみる西洋精神史』平野隆文訳、筑摩書房、2014年
- 鈴木覺、福本直之、原野昇訳『狐物語』岩波書店、2009年
- conte ; Marie Colmont, dessins ; F.Rojankovsky, *Mibka*, Les classiques du Père Castor, Flammarion (ISBN 978-2-0816-0240-3, ISSN1768-2061), en France, 1941

